常葉大学
自己点検・評価報告書

令和４年度

常葉大学 自己点検・評価委員会

目　次

Ⅰ　総評　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

Ⅱ　第１段階評価の担当部署　・・・・・・・・・　3

Ⅲ　各基準における自己点検・評価のまとめ

基準２　内部質保証　・・・・・・・・・・・・・　3

基準４　教育課程・学習成果　・・・・・・・　5

基準５　学生の受け入れ　・・・・・・・・・・・　8

Ⅳ　外部評価委員会による評価の概要　・・・　9

Ⅴ　自己点検・評価委員会名簿　・・・・・・・・　10

Ⅰ　総 評

平成 30 年度に「常葉大学自己点検・評価実施方針」を改正し、現在のような４段階の評価を規定した。第１段階評価は学部及び研究科の自己点検・評価、第２段階評価は自己点検・評価委員会による第１段階の自己点検・評価に対する適正さの点検・評価、第３段階評価は自己点検・評価委員会による大学全体の観点から点検・評価、第４段階評価は外部評価の４段階による評価を行っている。改正した翌年、令和元年度から評価を始め、今年度で４回目を迎えた。現在では、未達成の項目に積極的に取り組み、組織的にＰＤＣＡサイクルが機能しているとともに、未達成の項目が改善されつつあることが今年度の点検・評価で明らかになった。

「常葉大学自己点検・評価実施方針」に定めた全１０項目の自己点検・評価の基準のうち、昨年度の自己点検・評価で達成度が十分でなかった、「基準２　内部質保証」「基準４　教育課程・学習成果」「基準５　学生の受け入れ」及び新しく「高大連携の推進と学生募集の強化」の４項目について、本年度、自己点検・評価を行った。その結果、該当の学部及び研究科が行った第１段階評価では大きく改善が見られ、第２段階評価でも概ね「評価は適切である」と評価され、着実に課題解決に取り組んでいることが確認された。一方で、一部「適切でない」と評価された項目もあり、その理由として、昨年同様、根拠資料の不足や抽象的な記述で具体性に乏しいといった指摘があった。これらの点については、今後も継続して改善していく必要がある。上記４項目の基準における点検項目数は、１４項目であった。そのうち、学部における評価の及第点の割合は９４％、研究科における評価の及第点の割合は８７％となっており、第２段階評価においては、学部は９４％、研究科は７８％がその評価は適正とされている。このことからも、改善及び適正な自己点検・評価に努めていたことがうかがわれる。

第４段階評価である３名の外部評価委員からの評価についても、「自己点検・評価は概ね適切に行われている」との評価をいただいた。今後も引き続いて課題解決に努め、組織的にＰＤＣＡサイクルを回すことで、更なる教育研究及び業務の向上に努めていくこととする。

Ⅱ　第１段階評価の担当部署

基準２	「内部質保証」	学部、研究科
基準４	「教育課程・学習成果」	学部、研究科
基準５	「学生の受け入れ」	学部、研究科
その他	「高大連携の推進と学生募集の強化」	学部、研究科

Ⅲ　各基準における自己点検・評価のまとめ

基準２ 内部質保証

④ 教育研究活動、自己点検・評価結果、財務、その他の諸活動の状況等を適切に公表し、社会に対する説明責任を果たしているか。

（１）各学部、学科又は課程では、教育研究活動、自己点検・評価結果、その他の諸活動の状況等を公表しているか。

学部：大学公式ホームページや学生便覧等において、諸活動の状況を公表している。各学部の点検・評価の状況は次のとおりである。昨年度は１０学部すべてにおいて本項目の自己点検・評価を実施し、その結果、「十分に確保している」と評価したものは９学部、「ほぼ確保されている」と評

価したものが１学部であり、「あまり確保されていない」又は「まったく確保されていない」と評価した学部はなかった。本年度も、全ての１０学部に自己点検・評価を行った結果、「十分に確保している」と評価したものが６学部、「ほぼ確保している」と評価したものが３学部であり、「あまり確保されていない」と評価したものは１学部であった。第２段階評価では、全ての学部で「適切である」と評価された。この結果にみられるとおり、昨年度から「あまり確保されていない」と評価した学部が１学部増加したことから、引き続き改善に取り組む必要がみられた。

研究科：学部同様に、大学公式ホームページや学生便覧等において、諸活動の状況を公表している。各研究科の点検・評価の状況は次のとおりである。昨年度は全ての５専攻において本項目の自己点検・評価を実施し、その結果、「十分に確保している」と評価したものは１専攻、「ほぼ確保されている」と評価したものが４専攻であり、「あまり確保されていない」又は「まったく確保されていない」と評価した専攻はなかった。本年度も、全ての５専攻に自己点検・評価を行った結果、「十分に確保している」と評価したものが１専攻、「ほぼ確保している」と評価したものが３専攻であり、「あまり確保されていない」と評価したものは１専攻であった。第２段階評価では、全ての専攻で「適切である」と評価された。この結果にみられるとおり、昨年度から「あまり確保されていない」と評価した専攻が１専攻増加したことから、引き続き改善に取り組む必要がみられた。

（２）公表している場合、その情報の正確性、信頼性はどのように確保しているか。

学部：学部によって異なるが、大学広報委員及び学科長を中心に情報の精査・確認を行っている。各学部の点検・評価の状況は次のとおりである。昨年度は全ての１０学部において本項目の自己点検・評価を実施し、その結果、「十分確保している」と評価したものは４学部、「ほぼ確保している」と評価したものが６学部であり、「やや不十分」又は「確保していない」と評価した学部はなかった。本年度も、全ての１０学部に自己点検・評価を行った結果、「十分確保している」と評価したものが３学部、「ほぼ確保している」と評価したものが７学部であり、「やや不十分」又は「確保していない」と評価した学部はなかった。第２段階評価では、１学部を除き「適切である」と評価された。この結果にみられるとおり、この項目においては大きな改善がみられなかったが、全ての学部で「十分確保している」又は「ほぼ確保している」との評価であった。

研究科：研究科によって異なるが、複数の教員によって情報の精査を行っている。各研究科の点検・評価の状況は次のとおりである。昨年度は全ての５専攻において本項目の自己点検・評価を実施した結果、「十分確保している」と評価したものが２専攻、「ほぼ確保している」と評価したものが３専攻であった。本年度も、５専攻全てにおいて自己点検・評価を行った結果、「十分に確保している」と評価したものが２専攻、「ほぼ確保している」と評価したものが３専攻であった。第２段階評価では、１専攻を除き「適切である」と評価された。この結果にみられるとおり、この項目においては昨年度と同様の評価であったが、全ての研究科で「十分確保している」又は「ほぼ確保している」との評価であった。

●今後の課題

教育研究活動、自己点検・評価結果などの状況は、ホームページで積極的に公表している。全ての学部・研究科で情報の正確さや信頼性を十分に確保するため、各学部・研究科において継続的に組織的かつ定期的な検証の必要がある。

基準４ 教育課程・学習成果

④ 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

(2) 各学部、学科又は課程では、シラバスの内容（授業の目的、到達目標、学習成果の指標、授業内容及び方法、授業計画、授業準備のための指示、成績評価方法及び基準等の明示）は適切に示されているか。また、授業内容とシラバスとの整合性は確保されているか。

学部：課程・学科ごとにシラバス・チェックを行い、適切性を担保している。各学部の点検・評価の状況は次のとおりである。また、毎学期の授業アンケートにおいて、授業内容とシラバスとの整合性を確保している。昨年度は１０学部すべてにおいて本項目の自己点検・評価を実施した結果、「十分に確保されている」と評価したものが４学部、「ほぼ確保されている」と評価したものが６学部であった。本年度も、１０学部すべてにおいて自己点検・評価を行った結果、「十分に確保されている」と評価したものが５学部、「ほぼ確保されている」と評価したものが５学部であり、「十分に確保されている」との評価が４学部から５学部へ増加した。第２段階評価では、１学部を除き「適切である」と評価された。この結果にみられるとおり、この項目においては改善がみられた。

研究科：学部同様に、シラバスチェックを行い、客観的な整合性の担保を確保している。各研究科の点検・評価の状況は次のとおりである。昨年度は５専攻すべてにおいて本項目の自己点検・評価を実施した結果、「十分に確保されている」と評価したものが４専攻、「ほぼ確保されている」と評価したものが１専攻であった。本年度も、５専攻すべてにおいて自己点検・評価を行った結果、「十分に確保されている」と評価したものが４専攻、「ほぼ確保されている」と評価したものが１専攻であった。第２段階評価では、２専攻を除き「適切である」と評価された。この項目においては昨年度と同様の評価であったが、全ての研究科で「十分確保している」又は「ほぼ確保している」との評価であった。

●今後の課題

各学部及び研究科において、シラバスの内容が適切に示されていると同時に、授業内容とシラバスとの整合性が概ね適切に編成されている。引き続き、全ての学部・研究科で適切な教育課程への取組を推進していくために、定期的な検証・確認を行う必要がある。

⑤ 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

(3) 各学部、学科又は課程では、成績評価の客観性、厳格性を担保するためにどのような措置がなされているか。

学部：各学部、学科とも成績評価規程に則り、成績評価を行っている。また評価方法を記載したシラバスを公表することによって、客観性、厳格性を担保している。各学部の点検・評価の状況は次のとおりである。昨年度は１０学部すべてにおいて本項目の自己点検・評価を実施した結果、「非常に適切」と評価したものが２学部、「適切と言える」と評価したものが８学部であった。本年度も、１０学部すべてにおいて自己点検・評価を行った結果、「非常に適切」と評価したものが３学部、「適切と言える」と評価したものが７学部であり、「非常に適切」との評価が２学部から３学部へ増加した。第２段階評価では、１学部を除き「適切である」と評価された。この結果にみられるとおり、この項目においては改善がみられた。

研究科：研究科においても成績評価規程に則り、成績評価を行っている。また評価方法を記載したシラバスを公表することによって、客観性、厳格性を担保している。各研究科の点検・評価状況は次のとおりである。昨年度は５専攻すべてにおいて本項目の自己点検・評価を実施した結果、「非常に適切」と評価したものが４専攻、「あまり適切とは言えない」と評価したものが１専攻であった。本年度も、５専攻すべてにおいて自己点検・評価を行った結果、全ての専攻が「非常に適切」と評価した。この結果にみられるとおり、この項目においては改善がみられた。

⑥ 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

(1) 各学部、学科又は課程では、各学位課程の分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標を適切に設定しているか。

学部：学部によっては、独自のルーブリックを作成するなど、各学位課程の分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標を設定している。各学部の点検・評価の状況は次のとおりである。昨年度は１０学部すべてにおいて本項目の自己点検・評価を実施し、「非常に適切」と評価した学部はなく、「適切と言える」と評価したものが７学部、「あまり適切とは言えない」としたものが２学部、「指標を設定していない」としたものが１学部であった。本年度も、１０学部すべてにおいて自己点検・評価を行った結果、「非常に適切」と評価したものは１学部、「適切と言える」と評価したものが８学部、「あまり適切とは言えない」としたものが１学部、「指標を設定していない」と評価した学部はなかった。昨年度と比較して、特に「指標を設定していない」との学部が２学部から１学部へ減少した。第２段階評価では、１学部を除き「適切である」と評価された。この結果にみられるとおり、この項目においては改善がみられた。

研究科：研究科によっては、学生アンケート結果をもとに学習成果の指標を設定している。各研究科の点検・評価の状況は次のとおりである。昨年度は５専攻すべてにおいて本項目の自己点検・評価を実施した結果、「非常に適切」と評価したものが２専攻、「適切と言える」と評価したものが１専攻、「あまり適切とは言えない」と評価したものが２専攻であった。本年度も、５専攻すべてにおいて自己点検・評価を行った結果、「非常に適切」と評価したものが２専攻、「適切と言える」と評価したものが２専攻、「あまり適切とは言えない」と評価したものが１専攻であった。昨年度と比較して、特に「あまり適切とは言えない」と専攻が２専攻から１専攻へ減少した。第２段階評価では、２専攻を除き「適切である」と評価された。この結果にみられるとおり、この項目においては改善がみられた。

(2) 各学部、学科又は課程では、学習成果を把握及び評価するために、次の方法を用いているか。

（あ）アセスメント・テスト　　（い）ルーブリックを活用した測定

（う）学習成果の測定を目的とした学生調査　　（え）卒業生、就職先への意見聴取

学部：学部によって異なるが、様々な方法により学習成果を把握及び評価している。各学部の点検・評価の状況は次のとおりである。昨年度は１０学部すべてにおいて本項目の自己点検・評価を実施し、「(あ)（い）（う）（え）のすべてを用いている」と評価した学部はなく、「(あ)（い）（う）（え）のうち３つないし２つは用いている」と評価したものが６学部、「(あ)（い）（う）（え）のうち 1 つは用いている」と評価したものが３学部、「(あ)（い）（う）（え）のどれも用いていない」と評価したものは１学部であった。本年度も、１０学部すべてにおいて自己点検・評価を行った結果、「あ)（い）（う）（え）のすべてを用いている」と評価したものは１学部、「(あ)（い）（う）（え）

のうち３つないし２つは用いている」と評価したものが７学部、「(あ)（い）（う）（え）のうち 1 つは用いている」としたものが１学部、「(あ)（い）（う）（え）のどれも用いていない」としたものが１学部であった。昨年度同様に、「(あ)（い）（う）（え）のどれも用いていない」との学部が１学部あった。第２段階評価では、１学部を除き「適切である」と評価された。この結果にみられるとおり、この項目においては「どれも用いていない」と評価した学部があることから、引き続き改善に取り組む必要がみられた。

研究科：研究科によっては、院生が各自で学びの成果を振り返る『みちしるべ』を作成し、指導教員の点検をもとに、学習成果の把握及び評価を行っている。各研究科の点検・評価の状況は次のとおりである。昨年度は５専攻すべてにおいて本項目の自己点検・評価を実施した結果、「あ）（い）（う）（え）のすべてを用いている」と評価した専攻はなく、「(あ)（い）（う）（え）のうち３つないし２つは用いている」と評価したものが２専攻、「(あ)（い）（う）（え）のうち１つは用いている」としたものが２専攻、「(あ)（い）（う）（え）のどれも用いていない」としたものが１専攻であった。本年度も、５専攻すべてにおいて自己点検・評価を行った結果「あ）（い）（う）（え）のすべてを用いている」と評価した専攻はなく、「(あ)（い）（う）（え）のうち３つないし２つは用いている」と評価したものが２専攻、「(あ)（い）（う）（え）のうち１つは用いている」としたもの３専攻、「(あ)（い）（う）（え）のどれも用いていない」とした専攻はなかった。昨年度から、「(あ)（い）（う）（え）のどれも用いていない」と評価した専攻がなくなり、全ての専攻において１つ以上の指標を用いている結果となった。第２段階評価では、３専攻を除き「適切である」と評価された。

●今後の課題

成績評価の客観性、厳格性を担保するための措置について、概ね適切に実施されている。ただし、第２段階評価において、一部の研究科は「適切ではない」と評価された。この研究科については適切な措置を講じるよう、検証後の改善への取組が必要である。

⑦ 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

⑵各学部、学科又は課程では、学習成果の測定結果の適切な活用を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

学部：学部によっては、学生アンケート及び DP 達成度調査等に基づき、学生との懇談会並びに FD 研究会等を通じて、学習成果の測定結果の活用を行っている。各学部の点検・評価の状況は次のとおりである。昨年度は１０学部すべてにおいて本項目の自己点検・評価を実施し、「測定効果の活用、改善・向上への取り組みの両方を行っている」と評価したものが３学部、「測定効果の活用、改善・向上へ一方のみ行っている」と評価したものが５学部、「測定効果の活用、改善・向上への取り組みのいずれも行っていない」としたものが２学部であった。本年度も、１０学部すべてにおいて自己点検・評価を行った結果、「測定効果の活用、改善・向上への取り組みの両方を行っている」としたものが６学部、「測定効果の活用、改善・向上へ一方のみ行っている」と評価したものが３学部、「測定効果の活用、改善・向上への取り組みのいずれも行っていない」としたものが１学部であった。昨年度と比較して、「測定効果の活用、改善・向上へのいずれも行っていない」と

評価した学部が２学部から１学部へ減少した。この結果にみられるとおり、この項目においては改善がみられた。

研究科：研究科によっては、FD 研修において、大学院に求められる教育課程及びその内容等をテーマに研修を行い改善・向上に取り組んでいる。各研究科の点検・評価の状況は次のとおりである。昨年度の自己点検・評価において、５専攻すべてで実施した結果、「測定効果の活用、改善・向上への取り組みの両方を行っている」と評価したものが２専攻、「測定効果の活用、改善・向上へ一方のみ行っている」と評価したものが１専攻、「測定効果の活用、改善・向上への取り組みのいずれも行っていない」としたものが２専攻であった。本年度も、５専攻科すべてにおいて自己点検・評価を行った結果、「測定効果の活用、改善・向上への取り組みの両方を行っている」としたものが４専攻、「測定効果の活用、改善・向上への取り組みのいずれも行っていない」としたものが１専攻であった。昨年度と比較して、「測定効果の活用、改善・向上への取り組みのいずれも行っていない」と評価した専攻が２専攻から１専攻へ減少した。この結果にみられるとおり、改善がみられた。

●今後の課題

学習成果の測定結果の適切な活用および改善・向上への取り組みについて、概ね適切に実施されている。学部及び研究科において、引き続き具体的に改善案を提示し、推進することが必要である。

基準５ 学生の受け入れ

① 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

⑵各学部、学科又は課程では、下記内容を踏まえた学生の受け入れ方針の設定

（あ）入学前の学習歴、学力水準、能力等の入学希望者に求める学生像

（い）入学希望者に求める水準等の判定方法

学部：学部によっては、高大連携活動などを通じた幅広い情報収集をもとに、学力水準や入学希望者に求める水準等を設定して、学生の受け入れ方針を公表している。各学部の点検・評価の状況は次のとおりである。昨年度は１０学部すべてにおいて本項目の自己点検・評価を実施し、「(あ)（い）のすべてを用いている」と評価したものが８学部、「(あ)（い）のうち１つは用いている」と評価したものが１学部、「(あ)（い）のどれも用いていない」と評価したものが１学部であった。本年度も、１０学部すべてにおいて自己点検・評価を行った結果、「(あ)（い）のすべてを用いている」と評価したものが７学部、「(あ)（い）のうち１つは用いている」と評価したものが２学部、「(あ)（い）のどれも用いていない」と評価したものが１学部であった。昨年度と比較して、「(あ)（い）のすべてを用いている」との学部が８学部から７学部へ減少する一方で、「(あ)（い）のどれも用いていない」と評価したものが１学部のままであった。第２段階評価では、全ての学部で「適切である」と評価された。この結果にみられるとおり、この項目においては引き続き改善に取り組む必要がみられた。

研究科：学部同様に、入学希望者に求める学生像および水準等の判定方法を定めて公表している。各研究科の点検・評価の状況は次のとおりである。昨年度は５専攻すべてにおいて本項目の自己点

検・評価を実施した結果、「(あ)（い）のすべてを用いている」と評価したものが３専攻、「(あ)（い）のうち１つは用いている」と評価したものが２専攻であった。本年度も、５専攻すべてにおいて自己点検・評価を行った結果、昨年度と同様に「(あ)（い）のすべてを用いている」と評価したものが３専攻、「(あ)（い）のうち１つは用いている」と評価したものが２専攻であった。第２段階評価では、全ての研究科で「適切である」と評価された。この結果にみられるとおり、この項目においては大きな改善がみられなかったが、全ての専攻で「(あ)（い）のすべてを用いている」又は「(あ)（い）のうち１つは用いている」との評価であった。

●今後の課題

入学前の学習歴、学力水準、能力等の入学希望者に求める学生像及び入学希望者に求める水準等の学生の受け入れ方針を、概ね適切に設定して公表できている。具体的に設定されていない学部があることから、全学的に検証し、公表できるよう組織的に取り組む必要がある。

Ⅳ　外部評価委員会による評価の概要

外部評価委員

No.	氏　名	所属等
1	松浦　高之	静岡市企画局　局長
2	稲葉　豊穂	静岡市商工会議所 中小企業相談所　所長
3	町塚　祐輔	大伸木工株式会社　代表取締役社長

外部評価委員会による評価は、大学内で行われた自己点検・評価（第１段階評価及び第２段階評価）の結果を受け、その自己点検・評価が適切に行われているか否かを評価するものである。本年度の結果は、以下のとおりである。

（１）基準２　内部質保証について
　自己点検・評価は、概ね適切に行われている。
（２）基準４　教育課程・学習成果について
　自己点検・評価は、概ね適切に行われている。
（３）基準５　学生の受け入れについて
　自己点検・評価は、概ね適切に行われている。
（４）その他　高大連携の推進と学生募集の強化
　自己点検・評価は、概ね適切に行われている。

総評

昨年度の課題であった項目に対する積極的な取り組みがみられる。また、FD 研修の継続、高大接続活動を活かした入試制度の導入など、18 歳人口の減少への対応に向け、教育の質保証や新たな取り組みにも着実に取り組んでいる。

Ⅴ　自己点検・評価委員会名簿　（学内）

No.	氏　名	役職等
1	江藤　秀一	学長
2	安藤　雅之	副学長（静岡）
3	窪田　眞二	副学長（静岡）
4	磯貝　香	副学長（浜松）
5	出口　憲	教務部長
6	今村　貴幸	学生部長
7	良知　恵美子	学長指名
8	中澤　寛元	学長指名
9	小田　寛人	短大部小委員会代表
１０	河上　泰英	事務局長
１１	野中　雅夫	学事顧問
１２	林　　啓子	法人本部事務局長